

第3回受賞作選考理由

選考委員長・金子芳樹

蒋介石政権時代の中国国民党の研究は、中国・台湾間の政治状況の変化をも反映して、近年、従来に比して事実関係を重視したより客観的かつ多面的なものとなりつつある。そのなかで、イデオロギーに縛られることの多かった時代の「通説」から解放され、さらにそれらに挑戦する研究が登場してくることは不思議ではない。樹中論文は、そのような新たな時代における中国政治思想・政治体制研究を象徴する論考といえる。

樹中論文は、1920、30年代における蒋介石の独裁イデオロギーの形成・発展過程を分析し、蔣が外来の独裁理論であるレーニン主義とファシズムを独自の解釈によって取り入れながら国民党の革命戦略を強化していく過程とその特徴を描き出そうとする。本論文は、蒋介石の演説を中心とする一次資料を丹念に追いながら、蔣が三民主義を国家統合のイデオロギー的基盤として掲げつつも、レーニン主義とファシズムが持つ厳格な綱紀と組織、個人の自由の制限、エリートによる権力独占といった点を以党治国のモデルとして模倣的に取り込み、また、独裁政治を支える党、軍事組織、秘密組織についても、レーニン主義的原則とファシヨ的行動様式を積極的に取り入れていった点を実証している。さらに、それらの受容の過程で、レーニン主義の階級闘争とファシズムの種族主義が選択的に切り捨てられ、両者の組織論、戦術論のみが集権政治のモデルとして合体的に導入されていく特徴が浮き彫りにされる。

本来イデオロギー的に敵対するはずのレーニン主義とファシズムとの相似性については従来から種々の研究があり、また蒋介石によるそれら両イデオロギーの合体的受容についても、ある程度は認識されていた。しかし、蒋介石政権の独裁イデオロギーの性格をこういった視点に基づいて本論文ほど克明かつ真正面から取り上げた研究は他に類をみず、その点で同分野の研究に新たな光を投げかけたといえよう。また、これらの分析を通して、蔣の独裁政治を、全体主義的傾向を有しながらも、民衆を動員した「下から」の大衆運動に結びつけることができず、実際には軍事機構とテロ組織に依存する権威主義的支配であったと特徴づけている点も興味深い。

さらに、蒋介石時代の中国国民党に関する歴史分析でありながら、「アジアの民族主義運動において、レーニン主義とファシズムがどのように選択的に取り込まれたか」という視点からの政治体制論としても高い水準に達しており、アジアの他の独裁体制との比較研究の可能性をも示唆している。

審査委員会は、樹中論文を、成熟度が高く説得力のある文体とともに、上記のような明快な論旨を持ったスケールの大きい意欲的な論考として、今後の中国政治思想・政治体制研究さらには比較政治体制研究に多くの示唆を投げかけるものと高く評価し、全員一致でアジア政経学会の優秀論文賞を授与するのにふさわしい論文であるとの結論に至った。